

言語技術教育

—生徒の主体的な学びを取り戻すために—

谷 村 朋 美（奈良育英中学・高等学校）

1. はじめに

「言語技術（Language arts）」とは、世界の多くの国々で実施されている言語教育のことである。我々は、この「言語技術」教育で思考と表現の方法を具体的なスキルとして指導し、論理的・批判的・分析的思考力や議論する力、記述力を生徒たちに身につけさせたいと考えている。そのため、本校では4年前より、三森ゆりか氏（つくば言語技術教育研究所所長）が主催する「言語技術」研修会に数名の教員が参加し、3年前からは中学の国語の授業に「言語技術」を導入している。現在は、言語の4機能である「話す・聞く・読む・書く」力と論理的・批判的・分析的思考力を身につけるための訓練としてこの「言語技術」の授業を高校へも拡大している。ここでは、中学2年生を対象にした国語の授業の取り組みと授業に対する生徒のアンケート結果を報告する。

2. 授業計画

1学期はテキスト分析2冊、2学期はパラグラフライティングの技術と絵本の分析、3学期は絵の分析を中心に授業を展開した。

言語技術教育を通して以下の4点の力を育てることを目標とする。①論理的思考力②批判的思考力③分析的思考力④記述力				
学期	学習内容	時数	具体的取り組み・目標	総括
1	問答ゲーム パラグラフの構造 要約 再話 描写・説明 コマ漫画 報告・記録 アピール テキストの分析	17	①問答を基本とした対話や議論を繰り返し、言語技術を身につける。 ②物語や絵、テキストの分析を繰り返し、対象の理解を深める。 ③パラグラフライティングの技術を身につける。 ①②③を繰り返す。	中間考査までは主にテキスト分析『ティーパーティーの謎』を実施した。テキスト分析は次の①～⑤の順番で進めた。①登場人物について説明する。②人物関連図を作る。③グループで人物関連図を確認する。④物語の出来事を時間軸の表に作成する。⑤グループで時間軸の表を確認する、である。授業者は、次の①～④の項目に従って生徒の理解度を確認していった。①登場人物の特徴を理解出来ているか。②登場人物が複雑に結びついている状況を理解できているか。③『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』または、作者・ルイスキャロルがこの物語とどのように関わっているかを理解しているか。④タイトル（原書）や地名などに込められたカニグズバークの意図を理解しているかである。これらについては殆どの生徒が概ね理解していた。中間考査後はパラグラフライティングの技術を再度学習した。文章を書く前の作業として「マッピング」と「アウトライン」を作成することに挑戦したが、生徒の作業に戸惑いが見られたため、2学期に再度取り組む。そして、テキスト分析『みえない雲』を実施した。この授業の目的は二つあり、1つ目はテキスト分析の方法を身につけること。2つ目は福島原発問題を考えることである。テキスト分析の内容は4点あり、①登場人物の特徴と設定（いつ・どこで）を図式化する。②グループで登場人物たちがどのような問題（健康・生活・政治）に直面したかを確認する。③物語の構造におとしこみ、主人公の変化を確認する。④日本で起こった原発事故について考えるきっかけとする、である。内容の理解については、期末考査でも確認する。また、夏期休業中に『みえない雲』のビデオ視聴、調べ学習を行い、更に学習を深めていく予定である。
2	問答ゲーム パラグラフの構造	25	①②③を繰り返す。	①過型②例示型③物語型④描写型でパラグラフを作成した。 また、要約・反論・説明などの記述も同時に行った。パラグラフを書く手順は殆どの生徒が概ね理解していた。しかし、工夫されたト

	再話 描写・説明 絵本の分析 要約 芸術鑑賞		ただし、1学期の反省から②、③を重視する。	ビクセンテンスが作れないことや主張を支える根拠が提示できないなど、課題は多く残った。さらに接続詞の使い方や語彙の貧弱さについても指導が必要である。絵本の分析は、夏期休業中に洋書と和書(『ゆきがやんだら』)の比較分析を行った。『森の中へ』は、絵を分析することで、絵本の中に隠された様々な物語を見つける作業をした。『いつもちくくの〜』は、絵を分析することで、少年の心情を読み取った。また、両方の作品を物語の構造にあてはめ、効果的な読み聞かせの方法を考えた。大半の生徒が意欲的に取り組んだ。また、非常に興味深い考察もあった。
3	絵の分析 テキストの分析 アニメーション・読み聞かせ パラグラフの構造	15	①を繰り返す。	絵の分析を2作品行った。分析する際のポイントとして①設定②人物③状況④象徴の4点を挙げ、グループで話し合った。絵から根拠を述べ、それぞれの意見を発表した。『チャタートンの死』では、人物の職業で様々な意見が出され、絵をかなり詳細に観察していることが分かった。次に『友情』を使ってテキスト分析をした。最初に読書へのアニメーションを実施し、それぞれの章を語るという作戦をした。全体を全員で確認した後は、物語で設定されている季節と内容が深く関係していることを気づかせた。反省としてパラグラフライティングの時間が十分にたなかった。来年度はまず、この取り組みから始めたい。

3. アンケート結果

【1学期】

2年C組20名(男子14名、女子6名)は、入学当初より発言が少なく、男女合同のグループでは議論が進まないことも度々あった。また、読書が習慣化されていない者も多くいた。しかし、1年間をかけて言語技術の基本を学んだことで2年生に進級した彼らの授業態度に大きな変化が見られた。例えば1学期、2冊の本を課題として与えたが、彼らはこれらの本を何度も熟読した上で授業に参加してくるようになった。昨年度は本を読むこと自体に拒絶反応を示す、もしくは、ぱらぱらと読んだ程度という者が少なくなかった。この変化について、本に書かれている内容が彼らを惹きつけているということもあると思うが、アンケート結果にもあったように、彼らが分析の技術を用いて本を読んでいくことが楽しいと感じるようになったことが大きな要因だと考えられる。また、それと同時にグループワークでの議論も活発になってきた。

1学期最後の授業後に生徒たちにアンケートを実施し、その結果から以下の3点のことがわかってきた。まず、項目3.「クラスメイトの発言を聞いて参考になることがあった」と感じ取った生徒が全員であった。これは、この授業がグループで議論することや全体の中で意見を出し合うといったことを基本としていることから、生徒が自主的に発言する機会が多いためだと思われる。また、このようなことは、項目13.「新しい知識や考え方を得ることができた(ある程度できた)」という生徒の回答からも明らかである。2点目は、項目2.「議論に積極的に参加したとあまり思わない」生徒も少なからずいた。これらの生徒が議論の輪に入れない理由は様々あるが、このような生徒やグループに対する指導は課題である。最後に、項目15.「授業に満足している」と答えた生徒は約9割いたが、項目5.「テキスト分析の方法を理解しているとはあまり思わない」と答えた生徒も少なからずいた。ここから、テキスト分析を通じた読解の楽しみではなく、単にグループワークが楽しい、本を読むこと

	a「そう思う」、b「ある程度そう思う」、c「あまり思わない」、d「思わない」	a	b	c	d	計
2	グループや複数人での議論に積極的に取り組んだ。	8	7	4	0	19
3	クラスメイトの発言を聞いて参考になることがあった。	14	5	0	0	19
5	テキストを分析する際の方法はある程度分かった。	3	10	6	0	19
13	この授業から新しい知識や考え方を得ることができた。	10	8	1	0	19
15	この授業に満足できた。	10	8	1	0	19

が楽しいというところで終わってしまっている生徒がいることがわかった。

【2学期】

2学期は2つの取り組みを行った。パラグラフライティングと絵本の分析である。まず、パラグラフライティングの技術を身につけるために、授業で次のようなことを繰り返し行った。まず有効なパラグラフを書く手順として、ブレインストーミングをしてマップを完成させ、そこからアウトラインを作成する。そして、トピックセンテンスを考えて、記述におとすという作業である。この一連の作業を、議論を交えながら繰り返し行った。そこから、2つの問題が明らかになった。1つ目は、生徒たちが有効なトピックセンテンスを考えることに苦戦したこと。2つ目は自分の主張を支える根拠(理由)を提示できないことである。特に2点目に関しては、根拠に事実と意見が混同していたり、主張を支える根拠に全くなっていなかったりした。改善策として、自分の書いた文章を他の生徒たちに見せ、生徒たちで問題点を指摘しあった。また、説明、要約、譲歩を使った反論など、様々な文章を書く練習も同時に行った。2つ目の取り組みは絵本の分析である。年齢を重ねていくと文章を読むことばかりに集中してしまうが、生徒は絵をじっくり観察し、分析の技術を用いて深い読みを実践していた。

2学期最後の授業後に生徒たちにアンケートを実施し、その結果から以下の2点のことがわかってきた。まず、項目2.「グループや複数人での議論に積極的に取り組んだ」と答えた生徒の数は、1学期の8人から2学期は11人に増えた。また、「あまり思わない」と答えた生徒の数も1学期4人から2学期は2人に減った。1学期のアンケート結果から、2学期当初は男女別のグループを作って議論を活性化させた。後半になるにつれて男女混合のグループでも活発に議論ができた。アンケートにも「今の段階で男女別のグループにしなくてもよい」、「同じクラスメイトなので男女関係なく(グループワークが)できると思う」というコメントがあった。2点目は、項目14.「授業の中で、このまま続けたらよいと思うのはどのようなことですか」という記述の欄に、「グループワーク」、「議論」、「テキスト・絵の分析」という回答が1学期に比べて多くあった。生徒たちはクラスメイトと議論を繰り返し、自分たちでテキストや絵の理解を深めていく行為に価値を見出しているようである。授業者のねらいとしてこれほど喜ばしいことはなく、彼らの知的好奇心を減退させることのないよう教材研究、教材開発に励みたい。最後に、今学期はパラグラフライティングの技術を身につけるために記述の課題を多く取り入れたが、提出された内容は不十分なものが多く、今後も添削と授業での指導を徹底したい。

	a「そう思う」、b「ある程度そう思う」、c「あまり思わない」、d「思わない」	a	b	c	d	計
1	この授業に自主的かつ意欲的に取り組んだ。	7	9	4	0	20
2	グループや複数人での議論に積極的に取り組んだ。	11	7	2	0	20
3	クラスメイトの発言を聞いて参考になることがあった。	15	3	2	0	20
12	この授業から新しい知識や考え方を得ることができた。	9	9	2	0	20

14	授業の中で、このまま続けたらよいと思うのはどのようなことですか。
	(複数回答) グループワーク、絵の分析、テキストの分析、議論、アニメーション、絵本の分析、要約

【3学期】

3学期は絵の分析を実施した。絵本の分析後だったこともあり、絵の分析にスムーズに移行するこ

とができた。授業ではワークシートを利用し、グループごとに議論を展開した。絵の設定（季節、場所、天気、時間など）や人物、状況、象徴を絵の中から根拠を見つけて分析することができた。

3 学期最後の授業後に生徒たちにアンケートを実施し、その結果から以下の 2 点のことがわかってきた。まず、項目 1.「この授業に自主的かつ意欲的に取り組んだ」、項目 3「クラスメイトの発言を聞いて参考になることがあった」、項目 12「この授業から新しい知識や考え方を得ることができた」という問いに「あまり思わない」と答えた生徒の数は、2 学期に比べて項目 1 は 4 人から 2 人へ、項目 3 は 2 人から 0 人に、項目 12 は 2 人から 0 人に減った。2 学期よりも生徒たちはクラスメイトと議論し、自分たちでテキストや絵の理解を深めていく行為に価値を見出しているようである。ただ、項目 13「美術館へ行きたいか」という問いに 7 人の生徒が「思わない」と答えている。絵の分析がしたい、読書をしたいという意欲はあるが、だからといって美術館まで足を運ぶという行為にはつながっていない。

	a「そう思う」、b「ある程度そう思う」、c「あまり思わない」、d「思わない」	a	b	c	d	計
1	この授業に自主的かつ意欲的に取り組んだ。	4	13	2	0	19
3	クラスメイトの発言を聞いて参考になることがあった。	11	8	0	0	19
12	この授業から新しい知識や考え方を得ることができた。	12	7	0	0	19
13	絵を見学するために、美術館へ行きたいと思った。	5	7	7	0	19

4. 終わりに

「言語技術」の授業では、中学 1 年生の最初に対話のスキルを指導する。例えば、「結論→根拠→まとめ」の形で答える、主語を明確にするなど、ルールを決めて繰り返し行う。日本ではしばしばあいまいな返事や非具体的な質問、根拠のない自己中心的な意見、察し合いの尊重が対話の中で繰り返される。もちろん、こういった対話が必要な場合があることは否定できない。しかし、時代がグローバル化、国際化と進むなかで、世界のどこでも通用する対話のスキルを身につけることはこれからの若者にとって必須である。また、日本の中学校・高等学校でよく見られる光景に、静かに黙って授業を受けている生徒の姿や教師が黒板に書いたものをきれいにノートに写すだけの生徒の姿がある。もちろん、知識の詰め込みや暗記重視の授業は必要である。しかし、これからの時代にこのような一方通行に偏った授業は見直すべき時期になってきているように思われる。以上のような問題点を改善するには、我々は「言語技術」教育が学校現場で早急に導入されなければならないと考える。「言語技術」を学んだ生徒は自分の意見に責任を持ち、堂々と人と議論する。また、相手の話にしっかりと耳を傾け、相手を受け入れることができる。そして自由に母語を操って分かりやすい文章を記述できるようになる。最終的には自国の文化に誇りを持った教養のある若者に育っていくのである。本校ではこの「言語技術」を用いて、社会に貢献できる生徒、自立して世界で渡り歩いていくことができる生徒を育てたいと考える。そのためにも「言語技術」の授業を今後も継続していく。

参考文献 MM サルト（2001 年）『読書へのアニマシオン』 柏書房

三森ゆりか（2002 年）『絵本で育てる情報分析力』 一声社、（2005 年）『子どものための論理トレーニング・プリント』 PHP 研究所、（2013 年）『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』 大修館書店